

阿久遺跡に思いはせる

八ヶ岳美術館 見学ツアー



講師の説明を聞きながら収蔵する
貴重な文化財を見学する参加者

原村八ヶ岳美術館は3日、同館で開催中の企画展「縄文前期の巨大祭祀場 阿久」(来年1月8日まで)の関連イベント「原村埋蔵文化財収蔵庫・阿久遺跡見学ツアー」を現地でを行った。地元や県内外から定員の15人が参加。村文化財係長の佐々木潤さんを講師に、収蔵される貴重な土器や石器などを見て回り、悠久の歴史に思いをはせた。

最初に佐々木さんは「村内には98の遺跡があり、ほとんどが縄文時代」とし、旧石器から、縄文、弥生、平安、鎌倉、江戸と時代を追って「ムラ」が始まり、終えん、復活、変貌を経て現在在原村の原

収蔵庫では「土器は煮炊きによって可食範囲を広げ、食料を求めて移動を繰り返す暮らしから定住を可能にし、生活や文化が発展し、ムラの出現を促した」と話した。縄文時代前期には土器の底が尖底から平底に変化していったことや、中期には模様が多くの立体的になったことを収蔵する土器を見せながら解説。関東などほかの地域の土器にうり二つの文様や形の土器が阿久で出土していることから、文化交流の可能性も指摘した。

収蔵庫は阿久遺跡(柏木)に隣接し、同遺跡をはじめ、村内で出土した土器や石器等を保管。普段は公開していないが、今日は撮影も許可。参加者はカメラに収めたり、メモを取ったりして真剣に聞き入った。質問も活発で予定の1時間半は収蔵庫のみで終了。遺跡見学は個々で行った。

形となる歴史を解説。